Japanese Association of Educational Psychology

352 教育心理学研究, 2000, 48, 352—360

2つの親和動機と対人的疎外感との関係

——その発達的変化——

杉浦　健[1]

本研究の目的は，拒否不安と親和傾向という2つの親和動機と対人的疎外感との関係，及びそれらの関係の発達差や男女差を調べることであった。中学生366名，高校生528名，大学生233名を対象に親和動機，対人的疎外感及び自我同一性についての質問紙調査を行った。その結果，拒否不安と親和傾向は高い正の相関を示すにもかかわらず，拒否不安は対人的疎外感と正の関係を，親和傾向は負の関係を示した。また，結果には男女差，発達的差異があった。(1)女子において，拒否不安は成長に伴い漸減した。(2)男子では，拒否不安は中学生で対人的疎外感と負の関係を示したのに対し，大学生では正の関係を示した。(3)拒否不安と親和傾向の相関は，中学生の方が，高校生，大学生よりも高かった。これらの結果から，2つの親和動機の変化は，対人関係を適応的に維持していくための発達課題を示しているのではないかと考えられた。

キーワード：親和動機，拒否不安，親和傾向，対人的疎外感，自我同一性

問　題

中学や高校の女子生徒の多くは一緒に行動する特定の友人たちを持っている。例えば教室の移動や昼食の時間，トイレなどに数人の友人と連れ立って行動することがよく知られている。女子生徒がこのような友人たちのグループに所属せず一人でいることはめったにない（佐藤, 1995)。彼女たちが交友の集団からはずされて独りになると，同時にクラスの中でも孤立してしまうことになり，それは時には不登校などの一因ともなる（菅, 1988)。そのため彼女たちは「自分の属しているグループからはみ出ないように並々ならぬ努力（気の使いよう）をしている」（保坂, 1993)。

佐藤（1995）は，女子高生がこのような特定の友人関係すなわち「グループ」に所属する理由を調べ，一人で浮いた存在になりたくないからという「浮いた存在になることの忌避」因子と複数の友人に支えられたいからという「複数からの安全保障の獲得」因子を見出した。そして女子高生が一人であることを恐れる気持ちや，一人でいることによって人づきあいができない人，変わった人と見られたくないという気持ちを持っていると考察した。

では彼女たちがそのような気持ちを持ち，外されまいと努力することによって，グループから外されなければ問題は無いと言えるだろうか。

大平（1995）は，「拒否されたくない」という気持ちを強く持っていると，本音を出しあって深くつきあうことを避けるようになり，友達づきあいや人間関係が希薄になってしまう事例を多く報告した。これに類する実証的研究でも堀・松井（1981）は，友人との距離を大きく取る「クールな交際」をしている者は他の交友類型（例えば，つくす交友やとけあう交友）に比べ精神的に疲れていることを明らかにした。上野・上瀬・松井・福富（1994）は，青年期の交友関係を調べ，友人との距離を大きく取り，行動的に同調的であろうとする者がいること，そのような者の中でも女子はむれ志向ともいうべきものを持ち，優等生的であるが人の目を気にしやすいこと，男子は劣等感や問題行動思慮（自殺や家出などの問題行動をしたいと思うこと）を持ちやすいことを指摘した。また「拒否されたくない」という気持ちは，対人恐怖症者に共通する特徴として，これまで多くの臨床的研究がなされてきた。例えば，小川（1979）は対人恐怖に悩む者の心理機制として，仲間から自分が異質な者として注目されることを嫌い，没個性的に振る舞おうとするものの，その一方で集団にとけ込めず違和感を感じることを指摘している。

これらの研究を考慮に入れると，たとえグループから外されないでいたとしても，「拒否されたくない」という気持ちを強く持つと，嫌われまいとして自分を出さないようになり，表面的に友人とつきあうようになってしまうと考えられる。そして本当の自分を理解

1　近畿大学教職教育部
〒577-8502　東大阪市小若江3-4-1
E-mail：ken356@mbox.kyoto-inet.or.jp

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

されていないと思う気持ちや，お互いに分かり合えないことによって（みんなといるにもかかわらず）一人ぼっちであるという感じや疎外されているような気持ちなどを感じると思われる。実際，落合・佐藤（1996）は，青年期の友人とのつきあい方の発達的変化を調べ，特に中学生が友人との間に距離を置こうとする自我防衛的なつきあい方をしているために疎外感を感じやすいことを示唆している。また「拒否されたくない」という気持ちは周りに気を使って自分を抑える行動をもたらすことになり，そのために自由に行動できないといった気詰まりな気持ちを引き起こすと推測できる。

これら「理解されていない感じ」，「一人ぼっちな感じ」，「疎外されている感じ」，「気詰まりな感じ」などの否定的な感情は，宮下・小林（1981）が疎外感として定義したもののうち，「対人的疎外感（対人的関わりの中で生じる孤独感や不信感）」や「圧迫拘束感（社会や周囲の圧力による拘束感）」などと類似している。そこでここではこれらの否定的感情を社会や周囲の人との関係の中で生じる疎外感であると捉え，宮下・小林（1981）に従い「対人的疎外感（interpersonal alienation）」と定義しておく[2]。「拒否されたくない」という気持ちは対人的疎外感を高めると考えられる。

ところでこの「拒否されたくない」という気持ちであるが，これは親和動機とも考えることができる。これまでの親和動機の研究は親和動機に2つの性質があることを指摘してきた。1つは分離不安から人と一緒にいたいという気持ちを表わし，他者からの拒否に対する恐れの要素を持つ「拒否不安（sensitivity to rejection）」（Sipley & Veroff, 1952）であり，もう1つは拒否に対する恐れや不安無しに人と一緒にいたいと考える「親和傾向（affiliative tendency）」（Atkinson, Heyns & Veroff, 1954）である。「拒否されたくない」という気持ちはこのうち拒否不安だと考えられるが，これまでの親和動機の研究は達成動機との関係を調べるものが多く，対人的疎外感などの否定的な感情との関係をほとんど調べてこなかった。例外の1つは成功恐怖の研究（Horner, 1974；堀野, 1995などを参照）であろうが，これらの研究は親和動機の達成行動に対する抑制効果に主眼が置かれ，対人的疎外感などには直接焦点は向けられていない。また落合・佐藤（1996）も，中学生の自我防衛的なつきあい方が対人的疎外感を引き起こす可能性を示唆しているが，実際にはつきあい方と対人的疎外感との関係について明らかにしていない。

本研究の目的は，拒否不安と親和傾向という2つの異なる性質の親和動機に注目し，その両者と対人的疎外感との関係を調べることである。そのため本研究では，2つの親和動機と対人的疎外感との因果関係モデルを設定し，異なる2つの親和動機がそれぞれ対人的疎外感をどのように規定するのかを明らかにする。仮説として，前述したように拒否不安が高いほど対人関係が表面的になってしまい，孤独感や理解されていないといった対人的疎外感が高くなると思われる。これに対し親和傾向を強く持つほど相手に親密な関係を求めることからお互いを分かり合える対人関係が可能になり，対人的疎外感は低くなると思われる。

ところで上述した青年の拒否不安や同調的な態度であるが，これはしばしば女子に強いことが指摘されてきた（榎本, 1997；菅, 1994；吉田・荒田, 1997）。また友人関係を問題とした研究も多くは女子を対象にしたものである（例えば, 天野, 1975；保坂, 1993；佐藤, 1995）。しかしながら拒否不安や同調的な態度は果たして女子に特有なのだろうか。例えば西原（1993）は「女の子が一人でお昼ごはんを食べられるようになるまで」というエッセーの中で，自身が子供の頃「嫌われたくない，仲間外れにされたくない」という不安（本研究の中では拒否不安）を常に持っていたと述べた。彼女はその理由を自分が「女の子」だったからと説明しているが本当にそうなのだろうか。同様の気持ちは程度の差こそあれ男子にも存在するのではないだろうか。実際に上野ら（1994）の結果でも他者に同調的で仲間外れを恐れる男子が存在する。また西原（1993）のエッセーの題名が象徴的に表わすように，拒否不安の強さには発達的な差異もあると思われる。

そのため本研究では中学生・高校生・大学生を調査対象とし，2つの親和動機（拒否不安と親和傾向）の発達的差異や男女差，また親和動機と対人的疎外感との関係の発達的差異や男女差について調査を行った。

方　法

被験者　大阪府内2校，福井県内1校の公立の中学生（男子187名, 女子179名），大阪府内3校，福井県内1校の公立の高校生（男子315名, 女子213名），京都府内国立大学と大阪府内私立大学の大学生（男子109名，女子124名）。平均年齢は中学生13.56歳（SD＝0.51），高校生16.29歳（SD＝0.64），大学生20.04歳（SD＝1.33）であっ

[2] 宮下・小林（1981）では，「圧迫拘束感」は社会的疎外感（社会との関わりにおいて顕在化する疎外感）として定義されている。だが「圧迫拘束感」は，他の社会的疎外感である空虚感や無力感に比べ，より対人関係によって生じる性質を持つと考えられたため，ここでは対人的疎外感に含めた。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

た。

調査は1996年10月から11月に行った。中学生，高校生に対しては担任の教師により授業中に集団実施した。大学生に対しては心理学の授業中もしくは個別に配付して実施し，後に回収した。

調査項目　親和動機尺度：拒否不安及び親和傾向を表わす26項目を作成した。その際にはEPPS性格検査(肥田野・岩原・岩脇・杉村・福原, 1970)の「親和」項目や菅原(1986)による「拒否されたくない欲求項目」，予備調査において行った大学生女子への回想インタビューなどを参考にした。なお既にMehrabian & Ksionzky(1973)は，親和動機を拒否不安と親和傾向に分けて測定を行っている。だがこれは親和動機をその人の行動傾向から測定したものであり，「大勢のパーティに行くよりも良い映画を見る方が楽しい」や「討論で自分の意見を表明する時にはその前に他の人たちがどのような立場を取っているのかを見極めようとする」などかなり具体的な行動を示した項目で構成されている。本研究は学校における親和動機を念頭に測定しようとしており，これらの項目は適当でないと考えたため使用しなかった[3]。

対人的疎外感尺度：宮下・小林(1981)の疎外感尺度より，対人的疎外感と思われる「孤独感」因子12項目及び「圧迫拘束感」因子10項目を選び[4]，さらには女子学生へのインタビューを基に「自分らしさを出せない，自分らしさを理解されていない」ことを表わす5項目を加え，合計27項目を使用した。

自我同一性混乱尺度：この尺度は拒否不安との関係を明らかにするために調べられた。自我同一性混乱と拒否不安との関係を調べたのは，自我同一性が未確立のために，その補償目的でグループの中での安定を強く求めるために拒否不安が起こると考えたためである。また自我同一性の確立状態が拒否不安の発達的差異を説明するのではないかと考えたためでもある。尺度として砂田(1978)の自我同一性尺度より「自我同一性混乱」因子9項目を使用した。この因子は「自分が何者であるのか，何をしたらいいのか分からない」ことを表わし，得点が高くなるほど自我同一性の確立ができていないことを示している。

以上3つの測定尺度の各々の質問項目に対して，それぞれ「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5段階で評定を行ってもらい，分析の際に5点から1点までに得点化した(逆転項目は逆のスコアリングを行った)。

なお加えて所属グループ(普段一緒に行動するグループ)の有無，その構成人数の調査も行った。

結　　果

親和動機尺度因子分析　親和動機尺度について主因子法，プロマックス回転で因子分析を行ったところ，固有値は，第1因子より8.84, 2.57, 1.46, 1.24, 1.04であった。その後，解釈のため因子数を4，3，2に指定して再度因子分析を行い，親和動機が2つの要素からなるという仮説に合致し，最も解釈が容易な2因子を採用した。なお因子の回転については，2因子の仮説行列を与えた斜交プロクラステス法も行ったが，同様の因子構造が得られた。因子負荷量が0.5未満の項目を削除した後，因子の命名を行った。

第1因子は「仲間から浮いているように見られたくない」，「どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない」，「仲間外れにされたくない」など，相手から拒否されてひとりぼっちになることを避けようとする気持ちを表わしており，2つの親和動機のうち「拒否不安」と考えられた。第2因子は「人とつきあうのが好きだ」，「友達とは本音で話せる関係でいたい」，「人と深く知り合いたい」など，人と親密な関係を維持したいという気持ちを表わしており，2つの親和動機のうち「親和傾向」と考えられた。各因子についてα係数を算出したところ，拒否不安は$\alpha=.88$，親和傾向は$\alpha=.86$と十分な信頼性が得られた。そこでこれら18項目について，各因子の項目得点を合計して下位尺度得点を算出し，親和動機尺度として使用した(TABLE 1)。

対人的疎外感尺度因子分析　次に対人的疎外感尺度について因子分析を行った。項目作成にあたっては，複数の因子を予想していたが，因子分析の結果，第1因子から第2因子間に固有値の急減が見られ(固有値は，第1因子より，9.45, 2.31, 1.34, 1.31, 1.01)，寄与率も35%と十分であったため，1因子を採用した。各項目は，宮下・小林(1981)の対人的疎外感の定義を基に，本研究の問題において設定した対人的疎外感の要素(「理解されてない感じ」「一人ぼっちな感じ」「気詰まりな感じ」)をほぼ網羅していると思われた。またα係数を算出したところ，

[3] ただし本研究では特に学校での友人を思い出すようには教示していない。これは大学ではクラスが実質上存在しないため，友人関係の中心が必ずしも学校と一致しないと考えられたためである。ただしはじめに普段一緒に行動するグループを聞いているため，中学生，高校生では学校での友人が中心に答えられていると推測される。

[4] 宮下・小林(1981)の疎外感尺度にはこの他に空虚感因子と自己嫌悪感因子が見出されている。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

TABLE 1　親和動機尺度因子分析結果

	I	II	共通性
仲間から浮いているように見られたくない	0.68	0.04	0.49
どんなときでも相手の機嫌を損ねたくない	0.67	-0.09	0.39
できるだけ敵は作りたくない	0.66	-0.04	0.42
友達と対立しないように注意している	0.64	-0.09	0.36
誰からも嫌われたくない	0.63	0.04	0.43
みんなと違うことはしたくない	0.63	-0.18	0.31
仲間外れにされたくない	0.59	0.23	0.54
一人でいることで変わった人と思われたくない	0.56	0.08	0.37
一人ぼっちでいたくない	0.51	0.29	0.50
人とつきあうのが好きだ	-0.16	0.76	0.47
友人とは本音で話せる関係でいたい	-0.15	0.71	0.41
友達には自分の考えていることを伝えたい	-0.13	0.70	0.41
人と深く知り合いたい	-0.11	0.70	0.42
友達と喜びや悲しみを共有したい	-0.03	0.69	0.46
知り合いが増えるのが楽しい	0.05	0.59	0.39
できるだけ多くの友達を作りたい	0.16	0.53	0.40
友達と非常に親密になりたい	0.09	0.53	0.33
一人でいるよりも人と一緒にいたい	0.25	0.50	0.44
プロマックス解による因子寄与(他の因子の影響を除去)	3.628	3.282	

TABLE 2　対人的疎外感因子分析結果

	I	共通性
自分の居場所がないように感じる	0.72	0.51
私は一人ぼっちであると感じることがよくある	0.70	0.48
何かに縛られ自由に動けないようだ	0.69	0.47
本当の自分を理解されているように感じる	-0.65	0.43
何かに追いつめられているような感じをよく持つ	0.65	0.43
うちとけて話ができる人は私にはあまりいないように思う	0.65	0.42
私には本当に理解し合える人はほとんどいないように思う	0.65	0.42
自分はやさしい人々に囲まれて決して一人ではないと思う	-0.62	0.39
みんなが冷たい目で私を見ているようだ	0.62	0.38
何かにせきたてられて生きている感じがする	0.61	0.38
何か言っても無視されることが多いようだ	0.61	0.37
あるがままの自分を出せない	0.60	0.36
私の毎日は実にのびのびしているように思う	-0.58	0.34
私を認めてくれる人はいないようだ	0.57	0.33
毎日が緊張の連続で息苦しさを感ずることもある	0.56	0.32
他人に気兼ねして自分のやりたいことができない	0.56	0.31
私は他人からあまり信頼されていないようだ	0.55	0.30
みんないつも温かい心で私を迎え入れてくれるように思う	-0.54	0.29
自分がしたくないことをさせられているとよく感じる	0.53	0.28
わけもなく疲労を感じることがしばしばある	0.51	0.26
悩み等を話せる友人がいない	0.51	0.26
固有値		9.48
寄与率		0.35

α＝.93と高い信頼性が得られた。因子負荷量が0.5未満の項目を削除し，21項目の得点を合計して対人的疎外感尺度として使用した（TABLE 2）。

自我同一性混乱尺度因子分析　主因子法による因子分析の結果，1因子が得られ，因子負荷量もすべての項目で高かったため，砂田（1978）と同様「自我同一性混乱」と命名し，項目得点を合計して尺度得点を算出した。α係数は0.74であった。

親和動機の発達的差異

2つの親和動機である拒否不安尺度と親和傾向尺度について男女差及び発達的差異を見た。各尺度について尺度得点を項目数で割って項目平均得点を出し，その結果をFIGURE 1に示した。

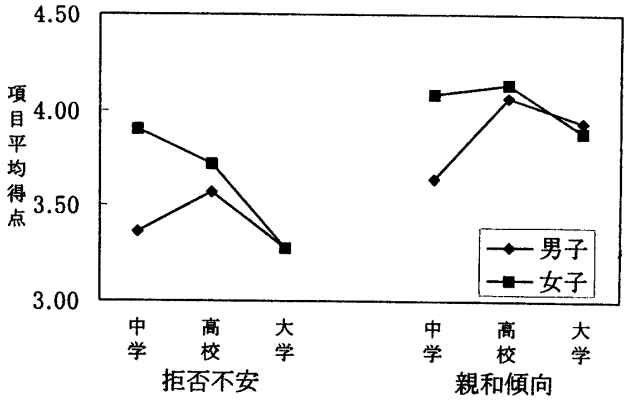

FIGURE 1　2つの親和動機の発達的差異・男女差

まず拒否不安尺度について，学校（中学・高校・大学）×性（男・女）の被験者間要因の分散分析を行ったところ，学校の主効果（$F(2,1105)=20.06, p<.01$），性の主効果が認められ（$F(1,1105)=19.58, p<.01$），交互作用も有意であった（$F(2,1105)=9.59, p<.01$）。単純主効果及びテューキー法（有意水準0.5%）による多重比較を行った結果，男子では高校生の得点が中学生，大学生よりも高く，女子では中学生が最も高く，高校生，大学生の順に得点が低くなっていた。男女差は中学生・高校生に見られ，女子が男子よりも得点が高かった。

親和傾向尺度についても同様に分散分析を行ったところ，学校の主効果（$F(2,1116)=16.93, p<.01$），性の主効果（$F(1,1116)=12.22, p<.01$），交互作用（$F(2,1116)=11.89, p<.01$）があった。単純主効果及び多重比較の結果，男子では中学生の得点が高校生，大学生に比べて低く，女子では大学生の得点が，中学生，高校生よりも低かった。男女差は中学のみにあり女子の得点が男子よりも高かった。

対人的疎外感の発達的差異

対人的疎外感尺度についても分散分析を行ったところ，学校の主効果（$F(2,1122)=8.34, p<.01$），交互作用（$F(2,1122)=4.74, p<.01$）があった。単純主効果及び多重比較の結果，男子では高校生の得点が中学生よりも高く，女子では高校生の得点が大学生に比べて高かった。男女差は大学のみにあり，男子が女子よりも高かった（FIGURE 2）。

親和動機と対人的疎外感の関係

次に親和動機と対人的疎外感との関係を見るために，相関係数を算出した。全被験者について相関係数を求めたところ，本研究の仮説で予想された拒否不安尺度

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

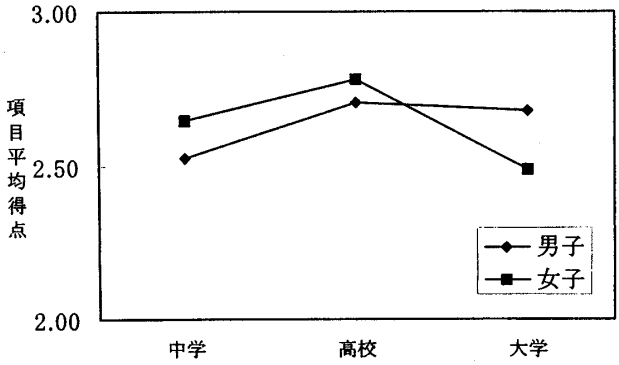

FIGURE 2 対人的疎外感の発達的差異・男女差

得点と対人的疎外感尺度得点との相関は見られなかった(r=.05, n.s.)親和傾向尺度得点と対人的疎外感尺度得点には負の相関があった(r=-.21, p<.01)。

そこで両者の関係に発達的差異や男女差があるかどうかを調べるため，学校ごと男女ごとに相関を算出したところ，男子において拒否不安尺度得点と対人的疎外感尺度得点との関係に発達差が見受けられた(TABLE 3)。すなわち中学生男子では，拒否不安尺度得点は対人的疎外感尺度得点と負の相関を見せたのに対して(これは仮説とは逆の関係を示している)，大学生男子では逆に拒否不安尺度得点と対人的疎外感尺度得点とには正の相関が見られたのである。

TABLE 3 2つの親和動機と対人的疎外感・自我同一性混乱との相関

		対人的疎外感		自我同一性混乱	
		男子	女子	男子	女子
中学	拒否不安	-0.20**	0.05	-0.01	0.01
	親和傾向	-0.17*	-0.27**	-0.15	-0.24**
高校	拒否不安	0.00	0.09	0.02	0.14
	親和傾向	-0.27**	-0.32**	-0.14*	-0.13
大学	拒否不安	0.23**	0.13**	0.17	0.25**
	親和傾向	-0.13	-0.30	0.01	-0.12

*p<.05, **p<.01

次に2つの親和動機が対人的疎外感をどのように規定しているのかを調べるため，2つの親和動機の尺度得点を独立変数に，対人的疎外感尺度得点を従属変数にして重回帰分析を行った(TABLE 4)。

その結果，中学男子以外では親和傾向尺度得点が対人的疎外感尺度得点を低くし，拒否不安尺度得点が対人的疎外感尺度得点を高くするという仮説通りの結果が得られたが，中学男子では拒否不安尺度得点が対人的疎外感尺度得点を低くするように働き(有意傾向)，親和傾向尺度得点は対人的疎外感尺度得点には影響していなかった。ちなみに拒否不安尺度得点と親和傾向尺度得点の相関は，中学r=.58(男子r=.52, 女子r=.58)，

TABLE 4 2つの親和動機を独立変数，対人的疎外感を従属変数とした重回帰分析における標準偏回帰係数と重相関係数

		「対人的疎外感」	
		男子	女子
中学	拒否不安	-0.23+	0.76**
	親和傾向	-0.13	-1.17**
	重相関係数	0.21*	0.39**
高校	拒否不安	0.27*	0.68**
	親和傾向	-0.75**	-1.26**
	重相関係数	0.31**	0.41**
大学	拒否不安	0.60**	0.52**
	親和傾向	-0.64**	-0.79**
	重相関係数	0.33**	0.41**

+p<.10, *p<.05, **p<.01

高校r=.47(男子r=.47, 女子r=.46)，大学r=.41(男子r=.40, 女子r=.42, すべてp<.01)であり，中学の相関係数は高校，大学の相関係数よりも大きく(p<.01)，拒否不安と親和傾向との関係に発達的差異があることがうかがわれた。

自我同一性混乱と親和動機との関係

自我同一性混乱尺度得点と2つの親和動機の尺度得点との相関を見たところ(TABLE 3)，拒否不安尺度得点と自我同一性混乱尺度得点に相関が見られたのは，大学生女子のみであった。高校生男子と中学生女子には，親和傾向尺度得点と自我同一性混乱尺度得点とに負の相関があった。

グループの有無，グループ人数

所属グループ(普段一緒に行動するグループ)の有無，構成人数についてTABLE 5に示した。もし所属グループの構成人数に例えば6～10人などの記述があった場合には，その中央値で代表させ，各学校，男女の平均値を算出した。構成人数に関して学校×性の被験者間要因による分散分析の結果，性の主効果のみがあり，男子の方が女子よりも構成人数が多かった(F(1,1009)=77.10, p<.01)。

TABLE 5 所属グループの有無，グループ人数

	全被験者数	グループ無の人数	%	グループ構成人数 M(SD)
中学男子	187	4	2.1	6.1(3.5)
女子	179	2	1.1	4.5(1.9)
高校男子	315	25	13.4	6.2(3.5)
女子	213	14	7.5	4.4(1.5)
大学男子	109	7	3.7	5.3(2.3)
女子	124	8	4.3	4.6(1.7)

考　　察

親和動機の発達的差異・男女差

親和動機の発達的差異・男女差について注目すべき

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

点が2つある。1つは拒否不安が女子で年齢とともに漸減することである。もう1つは，2つの親和動機について，中学生では女子の方が男子よりも尺度得点が高いのに対し，高校生・大学生ではその差が無くなるように変化することである(FIGURE 1)。女子における拒否不安の漸減の結果は，落合・佐藤（1996）の友達とのつきあい方の発達的差異についての結果に類似している。落合・佐藤（1996）は，自己防衛的つきあい方が中学生で高いこと，同調的なつきあい方が中学生から大学生にかけて漸減すること，またそのような発達的差異が女子に顕著に見られることを明らかにした。拒否不安尺度の項目には同調的，自己防衛的な要素が明らかに含まれており，本研究の結果は落合・佐藤（1996）を親和動機の側面から再確認したものといえよう。また中学生で女子の親和動機が高く，次第に男女差が無くなるという結果も既にいくつかの研究において示されている。例えば，落合・佐藤（1996）は年齢が増すにつれて友達とのつきあい方の男女差が無くなることを示した。また榎本（1997）も，親密的で友人と一緒にいること，一緒であることに重点をおくつきあい方を示す「親密確認」が年齢とともに漸減すること，中学では女子の方が男子よりもずっと高いがその差が年齢とともに次第に小さくなることを報告している。

なお集団内いじめの問題を論じた三島（1995, 1997）は，すでに小学校高学年において女子が男子に比べて高排他性の「仲良しグループ」を成立させること，彼女たちが友達からどう見られているかを気にする度合いが男子よりも強いことを明らかにしている。吉田・荒田(1997)も，小学校4,5年において女子の方が男子よりも排他的な小集団を形成しやすいこと，友達との意見の同調傾向が強いことを報告している。

これらの結果を総合すると，小学校高学年頃から男子よりも女子の方が拒否不安を中心とした親和動機を強く持ち，高校生，大学生と年齢を重ねるに従って拒否不安的な親和動機を弱めるため，親和動機に男女差が無くなると言えるだろう。

それではなぜこのような男女差があるのだろうか。その最も大きな要因は，問題でも述べたように女子が学校でおかれている状況であろう。菅(1994)は，中学・高校の女子の「仲良しグループ」の存在を指摘し，「何かの理由でこのグループに入りそびれると，その1年間は文字通り『孤独地獄』を味わうことになる」と述べている。そのような状況では仲良しグループに所属したいという欲求，すなわち親和動機は高まらざるを得ない。しかもグループに所属したとしても，「グループ内には微妙な葛藤が存在し，毎日，神経をすり減らしている」(菅, 1994) 中では，拒否不安も強くならざるを得ない。

本研究や落合・佐藤（1996），榎本（1997）で見られた女子の拒否不安の漸減は，拒否不安が対人的疎外感を生じさせることから，女子にとっては発達課題の1つとして考えることができる。拒否不安は仲良くなりたい，しかし自分を見せると嫌われるのではないかという葛藤の中で起こると思われる。拒否不安を減らしていくことは，女子が友人関係を構築しつつ同時に「自分らしさ」を表現するために乗り越えねばならない課題なのであろう。もちろん男子も拒否不安を持っている以上，程度の差はあれ同様の課題が存在すると思われる。ただし本研究において男子で拒否不安が高いのは高校時であり，課題になる時期が女子よりも遅いと推測される。

親和動機と対人的疎外感の関係

親和動機と対人的疎外感との関係にも男女差が見られたため，ここでは男女別に考察していく。まず女子であるが，TABLE 4を見ると女子は一貫して拒否不安が対人的疎外感を高める関係を持ち，それに対して親和傾向は対人的疎外感を減少させる関係を示していた。この結果は，仮説で考えたように親和動機には対人的疎外感に対して全く逆の影響を持つ2つの要素があることを示している。そしてこのことは，女子のおかれている心理的状況を非常にうまく説明する。

彼女たちは親和動機を強く持つことで，友人と深くつきあったり，「複数からの安全保障」(佐藤, 1995)を得ることができる。それによって「外れることによる孤独」としての対人的疎外感を感じずにすむ。親和傾向と対人的疎外感との負の関係はそれを示しているのだろう。だがその一方で彼女たちは，親和動機を強く持つことで，拒否不安も強く持つことになる。そして，それによって集団の中で自分を出せない状況に陥り，「集団の中での孤独」としての対人的疎外感を感じざるを得ない。拒否不安と対人的疎外感との正の関係はそれを示しているのだろう。

このような親和動機の矛盾した影響に苦しむのは，親和動機が強く，かつ拒否不安と親和傾向の関係が相対的に未分化な中学生の時により強いと考えられる。その意味で，親和傾向と拒否不安の相関が年齢にともなって減少することも，前述した拒否不安の減少と同じく，女子における発達的な課題といえよう。

なお，TABLE 4で中学生女子，高校生女子の親和傾向から対人的疎外感への標準偏回帰係数が1を越えた

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

のは，彼女たちの拒否不安と親和傾向との相関が高かったためと考えられる。

次に男子の親和動機と対人的疎外感との関係である。男子について注目すべき結果は，中学生男子において拒否不安と対人的疎外感とに負の相関が見られたことである（TABLE 3）。TABLE 4でも，有意傾向ながら唯一，拒否不安と対人的疎外感とに負の関係が示された。これはいったいなぜであろうか。

この結果の解釈には佐藤（1995）が女子高生のグループへの参加動機を調べた際に見出した「複数からの安全保障」という考え方が有効である。中学校のように集団の凝集性が高いところでは，仲間外れにされるよりは，たとえ自分が出せなくても集団の中でいた方が対人的疎外感を感じずにすみ，自分を守ることができるということである。嫌われないよう，仲間外れにされないようにすることが集団内では必要な配慮なのであろう。事実中学生男子で一緒に行動するグループを持っていないのは187名中4名と非常に少ない。拒否不安は結果的に集団でうまくやっていくための社会的スキルとして働いているといえるのではないだろうか。落合・佐藤（1996）や榎本（1997）は中学生にとっての友達は一緒にいるため，一緒に遊ぶための存在であると述べている。中学生男子にとっては，拒否不安によって自分らしさが出せずとも，友達と一緒にいられれば対人的疎外感は感じずにすむのだろう。

これに対して，高校生男子では拒否不安と対人的疎外感は無相関であり，大学生男子では中学生男子とは全く反対で，拒否不安は対人的疎外感と正の相関を示した。重回帰分析では，高校生男子，大学生男子とも，女子と同様，拒否不安は対人疎外感を高める関係にあった。中学生男子では，拒否不安に基づいて集団の中で自分を押さえることも問題にならなかったのに対して，高校生男子や大学生男子，及び女子も含めて，そのように自分を殺すことは青年期に起こる自分らしさを出したい欲求（遠藤, 1997）と矛盾することになり，対人的疎外感を高めてしまうのだろう。逆に言えば本研究の仮説が中学生男子にあてはまらなかったのも，既に青年期を経験した筆者が，自分らしさを出したいという欲求は当然のものとして中学生にもあるはずだ（中学生も同じような強さで持っているはずだ）という前提を持っていたからだろう。かつて自分が持っていたかもしれない気持ちですら，成長した今の自分から推測するのは難しいものである。

親和動機と対人的疎外感との関係を全体として見てみると，当初問題にした拒否不安の正の影響に加え，親和傾向による負の影響も大きく対人的疎外感を左右している。対人的疎外感を生じさせないためには，成長による自分らしさを求める欲求の増大に伴い，拒否不安を減らし，親和傾向を強めていくことが大切なのであろう。そしてそれによって自分らしさを呈示し，同時に親密な対人関係を維持していくことが自分らしさの成長，対人関係の成長と言えるだろう。

親和動機と自我同一性との関係

仮説では自我同一性混乱と拒否不安との関係を考えたが，両者に相関が見られたのは大学生女子のみであり，中学生，高校生においては全く相関が見られなかった。中学生や高校生では拒否不安の高さは自我同一性混乱とは関係せず，既に述べたような閉鎖的なグループの存在自体が拒否不安を引き起こすと考えられる。むしろ自我同一性と親和動機の関係で重要なのは，中学女子や高校男子で親和傾向と自我同一性混乱とに負の相関があったことである。なぜなら親和傾向は対人的疎外感と関わる重要な親和動機と思われるからである。自我同一性混乱と親和傾向との負の関係は，自分が分からない，自分に自信が無いために親和傾向が低下し，それが対人的疎外感を引き起こし，さらに親和的になれないという悪循環を示唆する。このことは自分らしさを出したい欲求とも関わる問題であり，今後明らかにしていかなくてはならない問題である。

まとめと今後の課題

本研究は親和動機と対人的疎外感との関係を明らかにするために，またそれらの関係の男女差及び発達的差異を明らかにするために行われた。その結果，親和動機は，拒否不安と親和傾向という2つの要素からなっていること，そしてそれらは中学生男子における例外をのぞき，かたや対人的疎外感を高め，かたや対人的疎外感を低くするという相反する影響を与えていることが明らかになった。これら2つの親和動機は，成長するに従い相関が低くなる傾向が示され，拒否不安と親和傾向が中学生では相対的に未分化なのに対して，成長するに従い意味的に分化することが示唆された。また2つの親和動機のうち，拒否不安の男女差，発達的差異は非常に特徴的であり，女子においては拒否不安が成長するに従って漸減すること，男子においては中学生と大学生では拒否不安が対人的疎外感に与える影響が全く逆になることが示された。

これらの結果は，他者と親しい関係を維持したいという気持ちと自分らしさを出したいという気持ちとに葛藤が存在すること，またその葛藤が成長に従い克服されていくことを示していると思われた。すなわち，

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

中学生では拒否不安と親和傾向とが未分化であり，親しい関係を維持したいと思うと（親和傾向を強く持てば），必然的に拒否不安も強くなってしまう。そのため，親和動機を強く持つことで，女子は「複数からの安全保障」（佐藤, 1995）による安心感を得ることができる一方で，自分らしさを出せない疎外感に苦しまなくてはならなくなってしまう。それに対して男子は友達と一緒にいられれば自分らしさを出せないことは気にならないため，拒否不安が高いことは当面，問題とならない。それが高校生，大学生になると，発達的に自分らしさを出したい，自分らしさを理解されたいと考える時期であるために，自分を押し殺すことになる拒否不安は男女とも一貫して対人的疎外感を高めることになる。けれども，拒否不安と親和傾向は次第に意味的に分化するようになり，女子の拒否不安も低くなることによって，自分を出しつつ親しい関係を維持することが次第に可能になっていく。

このような2つの親和動機の変化は，まさに自己の形成と適応的な対人関係の構築とに関わる発達課題だと考えられた。

ところで，上記のような議論に基づくと，中学生で自分らしさを出そうと思ったら，拒否不安と葛藤をおこしてしまい，特に拒否不安が社会的スキルとして働いていた男子などは，集団から浮いてしまい，対人疎外感が高まることになる。中学生が自分らしさを出せず「透明な存在」になっているのは学校のせいだけではなく，彼ら自身の持つ性質（もしくは学校という文脈において彼らが持たざるを得ない性質）に起因する部分もあると思われる。例えば，自己形成のための教育を考える時には，拒否不安の払拭や，拒否不安と親和傾向との意味的分離（他者と親しくなるために必ずしも自分を殺さなくていいのだということを分からせること）が必要になってくるだろう。

ただ本研究では自分らしさを出したい欲求と親和動機との関係が明らかになったわけではなく，両者の関係の解明が今後の課題として重要である。例えば中学生は集団の安全保障の中で何の疑問も持たず安泰でいるのか，それともその裏では自分らしさを出したいと思っているがそれが十分出せずにいるのかなど，自分らしさを出したい欲求を測定して調べる必要がある。またそれに関連して親和動機，特に拒否不安といじめとの関係も調べる必要がある。三島（1995）も「集団内いじめ」の原因の1つに一人ぼっちになりたくないという気持ちがあることを示唆している。集団での安全保障に代わる安全を保障するにはどうしたらいいのかということも考える必要がある。

最後に本研究の問題点であるが，本研究においては特に親和動機の2つの性質に注目し，親和動機尺度を独立変数に対人的疎外感尺度を従属変数として扱ったが，現実には集団でうまくやっていけず対人的疎外感を感じるために親和動機が低くなるということも十分にあり得ることである。今後，両者の因果関係の解明が重要になってくると思われる。

引用文献

天野隆雄　1975　女子生徒の心理とその教育　早稲田大学出版部

Atkinson, J.W., Heyns, R.W., & Veroff, J. 1954 The effect of experimental arousal of the affiliation motives on thematic apperception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **49**, 405—410.

遠藤公久　1997　交友関係　加藤隆勝・高木秀明(編)　青年心理学概論　誠信書房

榎本淳子　1997　青年期の友人関係の発達的変化　日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 144.

肥田野直・岩原信九郎・岩脇三良・杉村　健・福原真知子　1970　EPPS性格検査　日本文化科学社

堀　洋道・松井　豊　1981　学校や交友関係の実体とその影響　学習指導研修, **4**(2), 90—93.

堀野　緑　1995　成功恐怖研究の再検討　心理学評論, **38**, 301—319.

Horner, M.S. 1974 The measurement and behavioral implications of fear of success in women. In Atkinson, J.W. & Raynor, J.O. (Eds.) *Motivation and achievement*. Winston : Washington, D.C. Pp.91—117

保坂一巳　1993　中学・高校のスクールカウンセラーの在り方について—私立女子校での経験を振り返って—　東京大学教育学部心理教育相談室紀要, **15**, 65—76.

Mehrabian, A., & Ksionzky 1973 *A theory of Affiliation*. Lexington Books.

三島浩路　1995　集団内いじめの予防と解消　特別活動研究, **343**(9), 50—53.

三島浩路　1997 小学生の「インフォーマル集団内いじめ」の研究　日本社会心理学会第38回大会発表論文集, 120—121.

宮下一博・小林利宣　1981　青年期における「疎外感」の発達と適応との関係　教育心理学研究, **29**, 11—

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

18.
小川捷之 1979 概説・対人恐怖 小川捷之(編) 現代のエスプリ No.127 対人恐怖, 5—20.
落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的変化 教育心理学研究, **44**, 55—65.
大平 健 1995 やさしさの精神病理 岩波書店
西原理恵子 1993 怒涛の虫 毎日新聞社
佐藤有耕 1995 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, **3**, 11—20.
Sipley, T.E.Jr., & Veroff, J. 1952 A projective measure of need for affiliation. *Journal of Experimental Psychology*, **43**, 349—356.
菅佐和子 1988 思春期女性の心理療法—揺れ動く心の危機— 創元社
菅佐和子 1994 女の子から女性へ—思春期 岡本佑子・松下美知子(編) 女性のためのライフサイクル心理学 福村出版
菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について— 心理学研究, **57**, 134—140.
砂田良一 1978 自我同一性(Ego Identity)に関する一研究 —質問紙法を中心として 愛媛大学保健管理センター年報, **3**, 35—53.
上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 譲 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21—28.
吉田寿夫・荒田則子 1997 とかく女の子は群れたがる？—児童期における対人関係の性差に関する研究— 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 298.

付 記

本研究は平成8年度の京都大学教育学部の教育心理学課題演習ゼミでのディスカッションと調査を筆者がまとめたものである。本研究の問題を共有し，考察を共に深めて下さった岡崎裕二君，土井真由子さん，細川伸子さん，松尾由紀子さん，水谷しのぶさん（以上，当時3回生）に深く感謝いたします。

(1998.10.2 受稿, 2000.5.31 受理)

Developmental Change in the Relation Between Two Affiliation Motives and Interpersonal Alienation

Takeshi Sugiura (Depertment of Teacher Education, Kinki University) *Japanese Journal of Educational Psychology, 2000, 48, 352—360*

The purposes of the present study were to investigate the relation between 2 affiliation motives —sensitivity to rejection and affiliative tendency —and interpersonal alienation, and also to investingate developmental and gender differences in this relation. Questionnaires on affiliation motives, interpersonal alienation, and ego identity were completed by 366 junior high school students, 528 senior high school students, and 233 university students. The results revealed a highly positive relation between affiliative tendency and sensitivity to rejection. In spite of this result, affiliative tendency was negatively related to interpersonal alienation : on the other hand sensitivity to rejection was positively related to interpersonal alienation. Gender and developmental differences were also found : (1) Female subjects' sensitivity to rejection was negatively correlated with age. (2) Sensitivity to rejection and interpersonal alienation were negatively correlated in male junior high school student, but positivel correlated in male university students. (3) Affiliative tendency and sensitivity to rejection showed a higher positive correlation in junior high school students than it did in high school or university students. The results of the present study suggest that changes in these 2 affiliative motives are developmental tasks that maintain adaptive interpersonal relations.

Key Words : affiliation motives, sensitivity to rejection, affiliative tendency, interpersonal alienation, ego-identity

NII-Electronic Library Service